

特集

病気と社会を考える

そもそも病気とはいったい何だろうか。また、一体なぜ人は病気になるのか。新年号ということもあり、こうした普段あまり発することがないような、自明ともいふべき問いについて考えてみたい。

いま掲げたような問いは、一見抽象的な話題のようにも響くが、「現代の病」をめぐる状況を考えてと実質的な重要性を持っており、また、近年の最先端とも言える様々な研究分野が新たな光をあてて探求しているテーマでもある。例えば90年代頃から台頭してきた進化医学と呼ばれる分野は、病気というものを人間とそれを取り巻く環境とのギャップから捉えるという、根本的な視点を提起している(本特集の冒頭の井村裕夫氏の論文参照)。また近年、社会疫学と呼ばれる分野が発展し、例えばストレス、労働のあり方、経済状態、コミュニティのつながりなど、「健康ないし病気の社会的決定要因(social determinants of health)」,あるいは病気の生成と社会的・経済的な要因との関わりが明らかにされつつある(岩永・近藤論文参照)。

さらに、例えば大都市におけるかつてのニュータウンあるいは団地が急速に高齢化し、“都会型限界集落”などと呼ばれるに至っているが、そうした状況も含めた高齢化の中での地域社会の変容や、「無縁社会」の中での孤独死、うつ等の精神疾患の増加など、医療ないし病院サイドにとって、これまでにない新たな視点や対応が求められるような社会の変化が生じている。

それは必ずしもネガティブな側面ばかりではない。例えば、先般発表された経済産業省の産業構造ビジョンに示されるように、医療・健康分野をこれからの日本における主要な成長分野の1つに位置づけるといった、積極的な発想が存在していたり、また、医療・健康との関わりを含めた様々なレベルでの「幸福」研究や新たな指標づくりといったことが、自治体の取り組みを含めて近年きわめて活発になっているのである。

こうした新たな状況やテーマは、多くの困難を伴うものであるとともに、日本のみならず先進諸国が共通して直面しているチャレンジングな課題とも言える。このような時代構造の大きな変化を踏まえ、病院としてどのような対応やサービスが期待されるかについて、幅広い観点から考えてみたい。

広井 良典
千葉大学法経学部教授